

国道161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和57年度)2

## 高田館跡遺跡発掘調査概要

—高島郡今津町所在—



1982

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護

## はしがき

高田館跡遺跡は、高島郡今津町に所在する遺跡で、国道161号線バイパス工事に伴って調査されたものです。ただ、今回の発掘調査では、中世にこの地にあったと伝えられる高出館跡は発見されず、かわって弥生時代中～後期の方形周溝墓や竪穴住居、古墳時代後期の古墳などが発掘されました。なかでも、弥生時代中期の方形周溝墓には多数の土器が供獻され、規模も大きく注目を集めました。また、古墳の副葬品には、若狭地方との関係がうかがえるような須恵器などがあり、興味深いものでした。こうした調査成果は、若狭への分岐点にあたる石田川流域の古代像を雄弁に物語っているものといえよう。

発掘調査の正報告書は、後日刊行の予定であるが、とりあえず発掘調査の経緯と成果をとりまとめ、その概要を報告し、遺跡理解の一助としたい。本書が湖西地方の歴史を考えるために資料として活用されれば幸いである。

最後に、調査に協力を惜しまれなかった関係者、地元今津町、同町教育委員会、弘川の各位に感謝したい。

昭和57年12月

滋賀県教育委員会事務局  
文化財保護課長

外池忠雄

## 例　　言

1. 本書は、建設省の実施する国道161号線バイパス工事に伴う、高島郡今津町所在高田館跡遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、建設省からの委託（5,900,000円）を受けて財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者に、滋賀県文化財保護協会技師神谷友和を調査主任として実施した。
4. 調査、整理にあたっては、以下の諸氏の参加と協力を得た。

山口順子（滋賀県埋蔵文化財センター嘱託）、中川正人（主任調査員・保存科学）、木村哲基（奈良大学O.B）、寿福滋（主任調査員・写真）。

なお、調査にあたっては、今津町教育委員会ならびに地元弘川から格別の配慮を賜った。記してお礼申しあげたい。

5. 本書は神谷友和が執筆した。写真図版については、遺構を神谷が、遺物を寿福滋が撮影した。
6. 本書は、高田館跡遺跡発掘調査の概要であり、詳細については後日、正報告書の刊行を予定している。

# 目 次

## はしがき

## 例 言

第 1 章 調査にいたる経過 .....	1
第 2 章 遺跡の概要 .....	2
第 3 章 調査した遺構 .....	4
1. 弥生時代の遺構 .....	
2. 古墳時代の遺構 .....	
第 4 章 小 結 .....	6

## 図版目次

- 図版 1 (上) 調査前の高田館跡  
(下) 北部地区全景 (南より)
- 図版 2 (上) 第 1 号墳 (東より)  
(下) 第 3 号墳 (南より)
- 図版 3 (上) 第 2 号墳 (東より)  
(下) 第 2 号墳主体部 (西より)
- 図版 4 (上) 第 1 号堅穴住居 (西より)  
(下) 第 2 号堅穴住居 (南より)
- 図版 5 (上) 方形周溝塚 (東より)  
(下) 土塹塚 (北より)
- 図版 6 第 2 号墳主体部副葬品・須恵器
- 図版 7 第 2 号墳主体部副葬品・鉄器
- 図版 8 南部地区遺構平面図
- 図版 9 北部地区遺構平面図

## 挿図目次

- 第 1 図 遺跡位置図 ..... 1
- 第 2 図 トレンチ配置図 ..... 2

## 第1章 調査にいたる経過

昭和51～52年度にかけて国道161号線バイパスに伴って発掘調査を実施した高島郡今津町所在の弘川遺跡の整理作業の段階で、奈良・平安時代の「郷倉跡」と推定された本遺跡から新たな問題提起がなされた。それは饗庭野の丘陵から舌状にのびた台地上から、ごく微量であるが弥生時代前期（第Ⅰ様式）の土器が出土していたことが判明したからである。当時、第Ⅰ様式の土器は琵琶湖北半地域では対岸の長浜市川崎遺跡でしか発見されておらず、湖西地域では始めての出土であった。しかし、弘川遺跡より西の山を越えた若狭ではその出土例が報じられており、初期稻作文化の伝播を探る重要な鍵を握った土器であった。

昭和54年度より、弘川遺跡の眼前に広がる弘川・下弘部両地区では場整備事業が実施されることになり、弥生時代前期の遺跡を確認すべく国庫補助事業として急拠発掘調査を実施した。この時点、国道161号線バイパスは北に向かって工事中であった。発掘調査の結果、弥生時代前期の遺物包含層を含む広義の弘川遺跡は、バイパスの路



### 第1図 遺跡位置図

線をとりまく広範囲におよぶことを確認された。また、遺跡も縄文～平安時代にまたがる複合遺跡であると判明した。<sup>②</sup>折しも、石田川右岸寄りのバイパス敷地内に「高田館跡」と伝承される場所があり標式の建てられていることが地元の研究者などから指摘され、その取扱いをめぐって新聞に報じられた。高田館については、「高島郡誌」<sup>③</sup>296頁にも記載され地元でも周知の場所であったが、昭和40年版『滋賀県遺跡目録』にもれており、国道161号線バイパスの分布調査で見落していたことから、その善後策として今津町教育委員会より文化庁長官あてに文化財保護法第57条の6第1項の規定に基づき、昭和54年12月10日付けて遺跡発見通知を提出してもらい建設省とその取扱いについて協議を行った。高田館については、標式等の移転について関係者間で合意があり、移転後発掘調査することになったが、合せて弘川遺跡が路線内にまで広がることから、昭和55年度のは塙整備に伴う発掘調査の結果を見て、本格的な調査方針を打合わせることになった。その後、弘川遺跡の弥生時代の包含層が、路線の未工事区域の南半にのびることが明らかになり、<sup>④</sup>調査体制の整った昭和57年度に「高田館跡遺跡」発掘調査として、石田川以南のバイパス敷地内全域を調査することになった。

調査は建設省が経費を負担し、滋賀県教育委員会の指導によって財團法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

## 第2章 遺跡の概要

石田川右岸の標高約105mに位置する高田館遺跡は、高島郡今津町弘川字高田に所在する。（今回の発掘調査範囲は昭和51～52年度実施の平安時代の郷倉跡として知られる弘川遺跡の北延長線上である。）高田館跡は『高島郡誌』の記載によれば、その内容は、「今津村大字弘川の西北に字高田を称するあり。嘉



第2図 トレンチ配置図

吉年間（1441～1443年）高田宮内太輔橋義忠の館址なりと云ふ。義忠は下野国高田城主、後に仁右衛門義直称すと伝ふ。義直の事他に所見なし。猶母ぬべし。城址三反余歩、土井形家中屋敷の跡もあり。中央に義直の靈を祀りて高田明神と称す。高田家の子孫前川氏衰えて後祠も廢絶せり。明治33年春城址の東に接続する地を発掘して土器を発見せり。其地古墳なりしなり。」である。今回の発掘調査を実施したバイパス敷地内の北側の場所に高田館にちなんだ橋義直の碑がある。そのようなことから高田館跡の存在を予想して南側から順次発掘調査を始めた。全調査範囲は、東西50m、南北120mに及び、現地形の出畠の形状にあわせて南部地区・中部地区・北部地区と呼称して3地区に分けて発掘調査を実施した。遺物等の取りあげや遺構の配置に便宜を計るために、道路の南北のセンターラインを軸にして、東西方向に3m間隔の方眼を設定した。

南部地区は西側が高い微高地形を示し、東側で北流する自然流路が検出された。西側の微高地上では、方形の堅穴住居1棟と溝状遺構・土塙・ピット群などが検出された。堅穴住居と周辺の各遺構との先後関係は堅穴住居が最も古く、次いで溝状遺構・土塙が重複している。微高地上の内側に幅約1～2m、深さ約30～80cmの東流する溝状遺構が確認された。遺物は溝の埋土より弥生式土器片と扁平片刃石斧を出土した。<sup>⑯</sup>自然流路の東側中央付近が微高地状に若干高くなっており、その微高地の西側裾部底面上より弥生時代中期後半（第IV様式）の壺・甕・鉢・高壺などの土器が出土した。

中部地区は南北両地区にはさまれていて現地形は一段低くなっている。耕土より順次一層ずつ掘り下げていったが、各層とも少量の遺物を含むだけで、遺構は検出されなかった。現地形がすでに一段低い状態であり、旧地形では谷状地形を成しており、遺構などは周辺の微高地上に存在したと考えられる。

北部地区は調査区のすぐ北側が石田川の堤防に面しており遺跡の北限が求められる。この地区は微高地を形成するものであり、その微高地上に堅穴住居1棟、方形周溝墓1基、古墳3基、土塙墓1基が検出されており、他に溝状遺構・土塙・ピット群などが確認された。主要遺構については次章でのべるが、西側中央付近にみられる半円状の溝状遺構は、幅約40cm、深さ数cmを測り、古墳周溝の痕跡を示すものであるかもしれない。北西流する溝状遺構は幅約1.2m、深さ約70cmを測り、溝の埋土より弥生式土器片を出土し、方形周溝墓や第2号墳に先行するものである。ピット群は掘立柱建物や倉庫跡などを推定できるような整然とした規画性を伴うものではない。北部地区

の南側3分の1程はすでに旧地形が一度削り取られており、そのために第2号墳・第3号墳・溝状遺構の一部は消失している。その後再び、微高地の南側を拡張して現地形になったようである。その拡張された時期が高田館と関連づけられるのかどうか今回の調査では明らかにできなかった。ただ、拡張して盛土した部分の現地形の南側斜面・裾部では小礫などがならんだように検出されている。しかし、石のならびに規則性がなく雑然としており、館に伴うものとは考えがたい。また、出土遺物からみても縄糸時代を含む15世紀代の遺物はなく、遺構・遺物両面から判断して高田館跡の痕跡を証明する資料を得ることはできなかった。

### 第3章 調査した遺構

#### 1. 弥生時代の遺構

(1) 第1号竪穴住居 南部地区北西方に位置する一辺約7m、深さ約10cmの方形の竪穴住居で、地山を掘り込んでつくられている。東壁と南壁の内側には幅約20cm、深さ約10cmの側溝をもち、床面はほぼ水平な状態である。南壁中央部付近には直径約50cm、深さ約40cmの貯蔵穴かと考えられるピットを検出した。主柱穴は直径約30cm、深さ約20cmを測り、四方に確認できる。竪穴住居の北辺部・西辺部は地山まで削平され残っておらず、全体の詳細は不明である。住居内北側は幅約1m、深さ約40cmの溝状遺構で切られている。

出土遺物は住居の埋土内より若干の土器片が出土し時期を決める程の資料ではないが、これまでの調査から考えて弥生時代から古墳時代初頭の時期が推定される。

(2) 第2号竪穴住居 北部地区中央部に位置する直径約5m、深さ約10cmの円形の竪穴住居で、地山を掘り込んでつくられている。南側の内側には幅約10cm、深さ約5cmの側溝をもち、床面はほぼ水平な状態である。中央部付近には直径約70cm、深さ約40cmのピットが検出された。そのピット内の埋土は焼土や炭化物を多く含み、内壁も焼けた痕跡を残しており炉として使用されていたと考えられる。住居内にはピットを数個確認するが、住居の東半部を第1号墳周溝に切られているため、主柱穴の構造など決められない。おそらく、4本柱を備えたものであろう。

出土遺物は住居の埋土から、弥生時代中期後半(第IV様式)の壺・甕などの土器片

が出土している。

(3) 方形周溝墓 第2号堅穴住居の北側に隣接し、一辺約14mの方形周溝墓であり、周溝は最大幅約4.5m、深さ約40~80cmで各コーナー部分が狭まり浅くなっている。溝は地山を掘り込んでつくられ、U字状をなす。主体部はすでに盛土が削平されている、その痕跡を確認することはできなかった。なお、方形周溝墓の北半部は雨水に切断されて消失している。

出土遺物は東辺の溝や南辺東よりの溝の底面上から多量の土器片が出土しており、おそらく方形周溝墓に供獻されたものと考えられる。土器は弥生時代中期後半（第IV様式）のもので、器形は壺・甕・高壺・鉢などであり、石製男根や磨製の凹石状の異形石器なども伴出している。

## 2 古墳時代の追拂

(1) 第1号墳 北部地区の東側に位置する直径約8mの円墳で、墳丘は既に削平され基底部のみ残存する。周溝は幅約1.5m、深さ約10~40cmを測り、西側や北側の周溝の底面はかなり凸凹し南側は水平である。東側は周溝の一部が削平されている。墳丘中央部には東西方向に主体部が検出された。主体部は、幅約1.5m、長さ約4m、深さ約10cmの不整形な長方形をなす。木棺直葬と思われるが、残りが悪く棺の痕跡は認められなかった。副葬品は土塗の西小口付近より須恵器の壺・甕各1点と鉄製品1点が出土した。また、周溝内の南側で須恵器の壺蓋2点、甕1点が底面上で出土し、北側でも壺1点が上層から出土した。

時期は出土遺物から推定して、6世紀中葉頃と考えられる。

(2) 第2号墳 第1号墳に南接する位置にあり、直径約11mの円墳で墳丘は既に削平され基底部のみ残る。周溝は幅約3m、深さ約30~60cm残存しており、西側や北側の底面はかなり凸凹している。周溝の南側・東側はすでに消失している。墳丘中央部には第1号墳と同じ向きで、東西方向の木棺直葬の主体部が検出された。

主体部は掘り方の規模が幅約2m、長さ約5mであり、棺は幅約70~80cm、長さ約3.5m、深さは検出面より約40cmを測る。棺幅は東側の方が西側より広くなっている。棺内の床面には赤色顔料が部分的に残存していた。副葬品は棺内の西小口付近と中央部両側で鉄鏃11点、刀子1点が出土した。東木口付近では須恵器の杯7組、短頸壺1

組、提瓶、壺、樽形甕、平底甕各1点の計20点がほぼ現位置で検出された。周溝の北側では溝の中層より甕の破片が数個体分ほどまとまって出土し、また、西側では底面上より甕の破片が1個体分出土している。

時期は出土遺物などからみて6世紀中葉頃と考えられる。

(3) 第3号墳 北部地区の西側に位置し、直径約9mの円墳で、墳丘はすでに削平され基底部のみ残る。周溝は幅1.5m、深さ約10cmを測り、南半分は消失している。周溝は浅く底はほぼ水平である。中央部には東西方向の主体部が検出された。主体部は幅約1.5m、長さ約4m、深さ約10cmで長方形をなす。木棺直葬と思われるが、残りが悪く棺の痕跡は認められなかった。副葬品は東小口付近より鉄製品1点が出土した。

時期は決め手となる資料がないが、ほぼ第1・第2号墳に近似するものであろう。

(4) 土塚墓 第1号墳の周溝南西部の外側に接して、幅約80cm、長さ約1.2m、深さ約25cmの長方形の土塚墓が検出された。土塚内には、炭化物などが若干含まれていた。床面はほぼ水平な状態であり、東南壁付近の床面上に須恵器の壊が2個伏せた状態で並んで置かれていた。おそらく、土器枕として使用されたと考えられる。土塚墓の規模が小さいことから、小児用と推定される。

時期は出土遺物からみて、6世紀末頃と考えられる。

## 第4章 小 結

今回調査した主な造構について、以下のとおりにまとめられる。

弥生時代の2棟の竪穴住居は、東側に位置する弘川B遺跡の竪穴住居などとともに、微高地上につくられた集落を構成するものであり、その北限を求めることができた。

方形周溝墓は、県内では服部遺跡など60ヶ所で多数検出されている。<sup>⑤</sup>しかし、今回検出された方形周溝墓は高島郡内の弥生時代のものとしては規模が最大であり、また、県下の諸遺跡の例と比較してもその規模は大きな部類に含まれる。方形周溝墓の一辺が15m前後を測るものには、伊香郡余呉町桜内遺跡A群第13号方形周溝墓、彦根市品井戸遺跡、野洲郡野洲町五之里遺跡2号方形周溝墓、守山市伊勢遺跡第3号方形周溝墓、守山市服部遺跡などがあげられる。

高田館跡遺跡の方形周溝墓の特色として、東側の溝の底面上に供献土器が多数こなされた状態で敷き並べられたように検出されたことがあげられよう。また、共伴した石製男根や凹み石状の磨製石製品も出土状況から判断して、混入したものではなく供献土器とともに何らかの祭儀に用いられたものと考えられる。

古墳時代の円墳については、これまで『高島郡誌』に古墳の存在が記載されていたが、墳丘がすでに削平されていたためにこれまで顧みられることもなかったが、今回3基の古墳を検出したことにより詳細が不明であった古墳群の存在が確認できた。

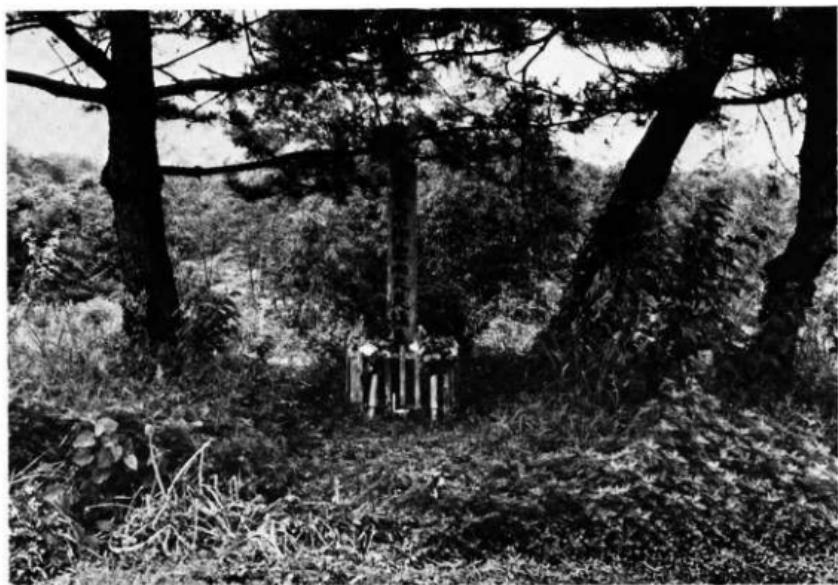
古墳は各々木棺直葬墳で单次葬である。同様な例は、高島郡内では新旭町下平古墳群の下平21号墳に類似がある。また、第1・第2号墳は主体部の副葬品とともに、周溝内に土器を供献している。さらに、古墳の立地などが丘陵上に形成するものではなく、石川右岸の平野部に築造されていることが特長である。

土器枕をもつ土塚墓は県内において高島郡安曇川町南市東遺跡や伊香郡高月町井口遺跡などに類似がある。南市東遺跡S X 1101は、坏1組が口に口縁部を下に伏せた状態で検出され、時期は6世紀後半頃と考えられる。このような土器枕をもつ埋葬方法は、現在のところ丹後地方の影響と考えられている。<sup>⑤</sup>

以上の調査結果から、本遺跡は弘川B遺跡、弘川古墳群として理解すべきである。

#### <註>

- ① 田中勝弘『弘川遺跡発掘調査報告書—古代郷倉跡—』(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、1979年)
- ② 山口順子「高島郡今津町弘川遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-1、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、1980年)
- ③ 『高島郡誌』(高島郡教育会、1927年)
- ④ 兼康保明・山口順子「高島郡今津町弘川遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ-3、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、1981年)
- ⑤ 磨製の扁平片刃石斧とはやや異なる、局部磨製の扁平片刃石斧の代用品的なもの。こうした変則的な石斧は、弘川B遺跡からも出土している。註④文献参照。
- ⑥ 『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』(第11回埋蔵文化財研究会資料、1982年)
- ⑦ 中江彰『南市東遺跡発掘調査概要』(安曇川町文化財調査報告2、安曇川町教育委員会、1980年)
- ⑧ 「高月町井口遺跡で土塚墓発見」(『滋賀埋文ニュース』第15号、滋賀県埋蔵文化財センター、1981年)



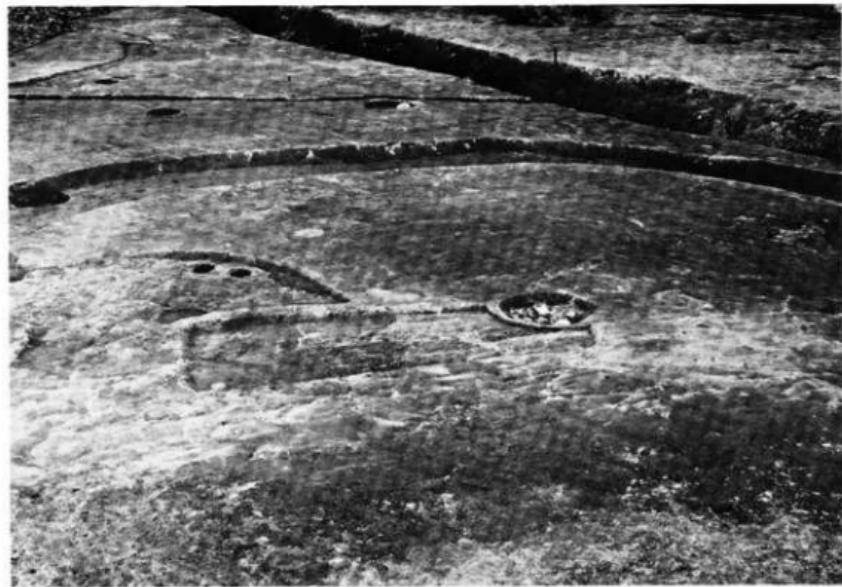
調査前の高田館跡



北部地区全景（南より）



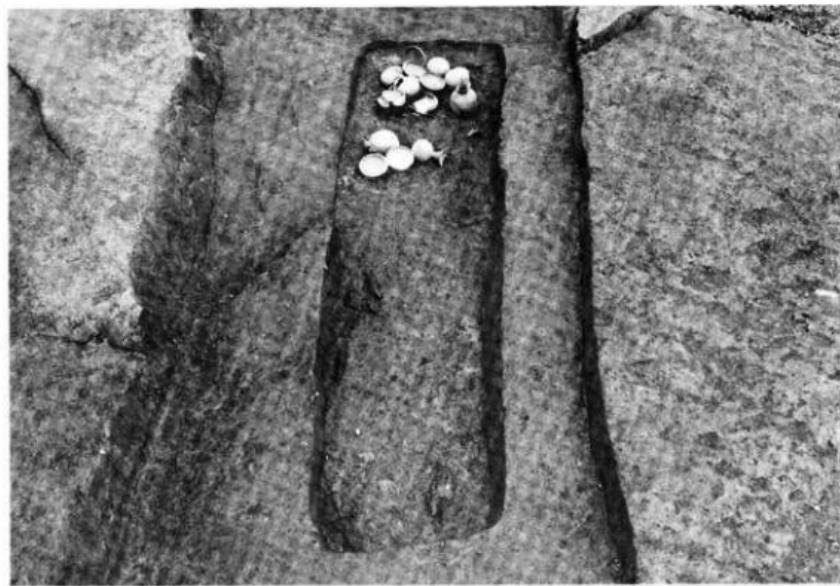
第1号墳（東より）



第3号墳（南より）



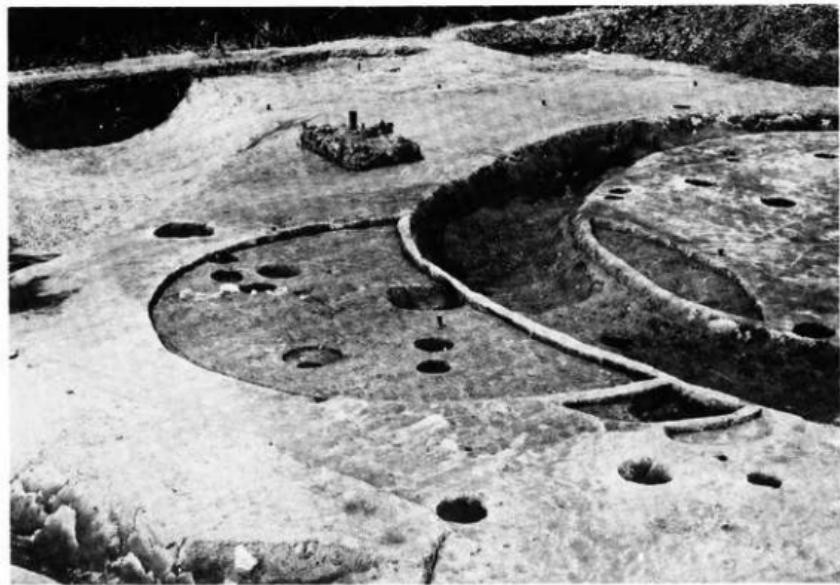
第2号墳（東より）



第2号墳主体部（西より）



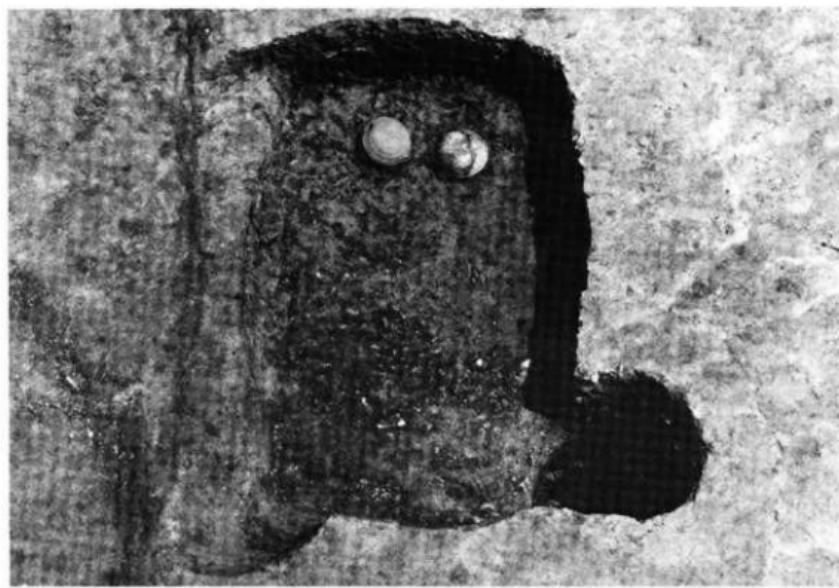
第1号堅穴住居（西より）



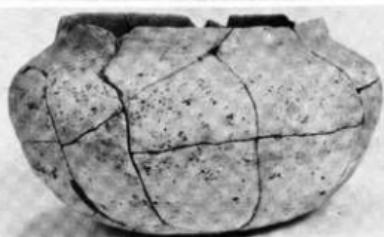
第2号堅穴住居（南より）



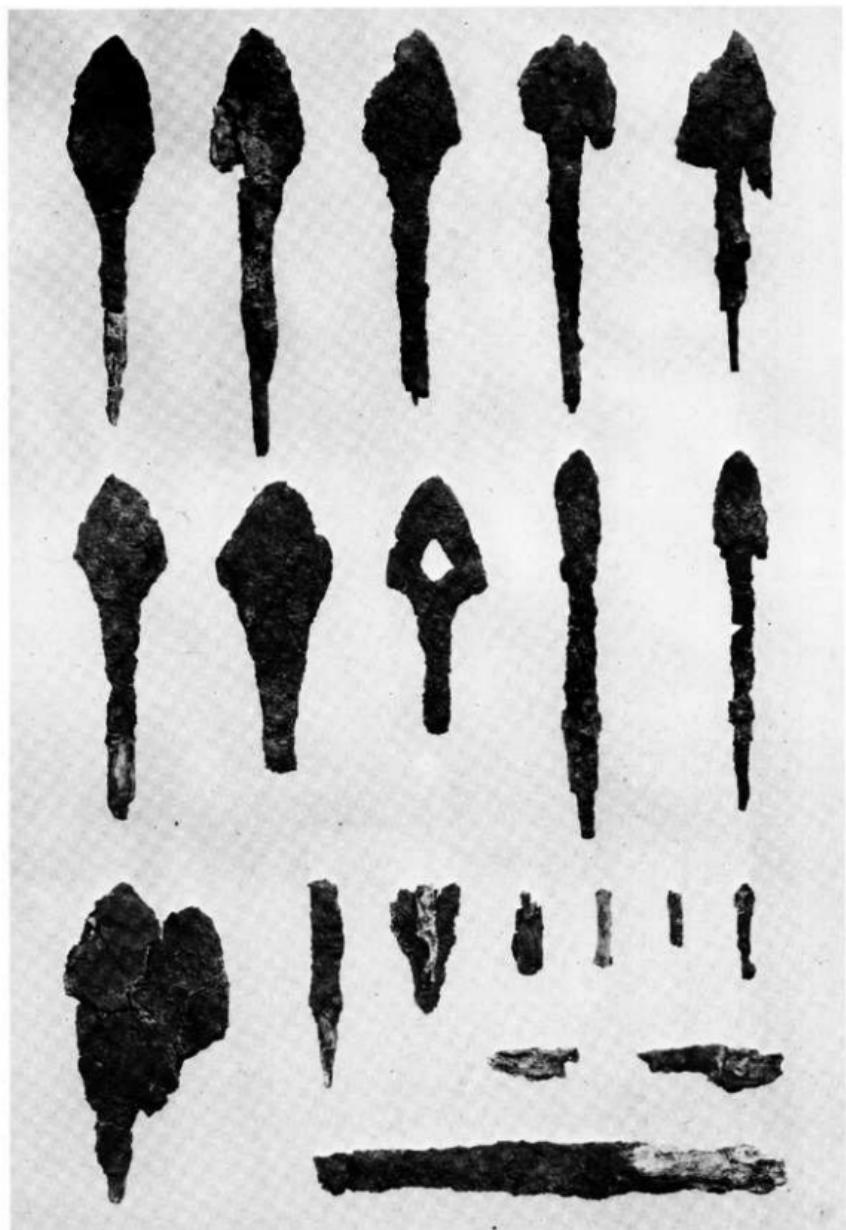
方形周溝墓（東より）



土塚墓（北より）

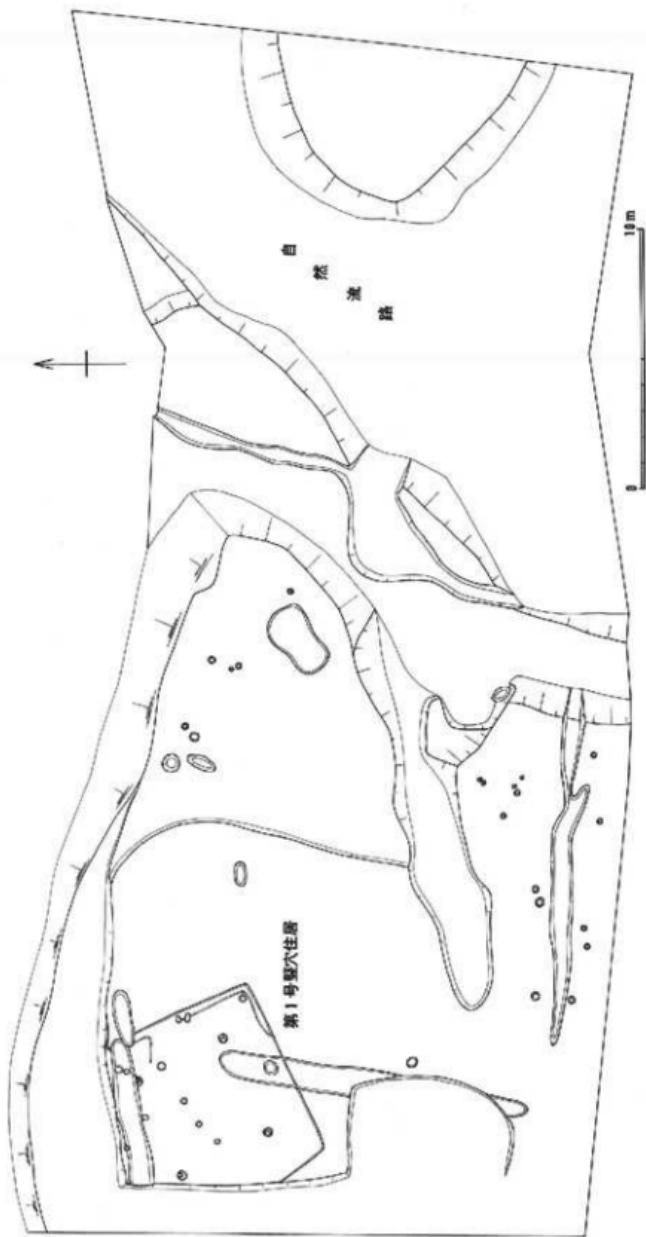


第2号墳主体部副葬品・須恵器

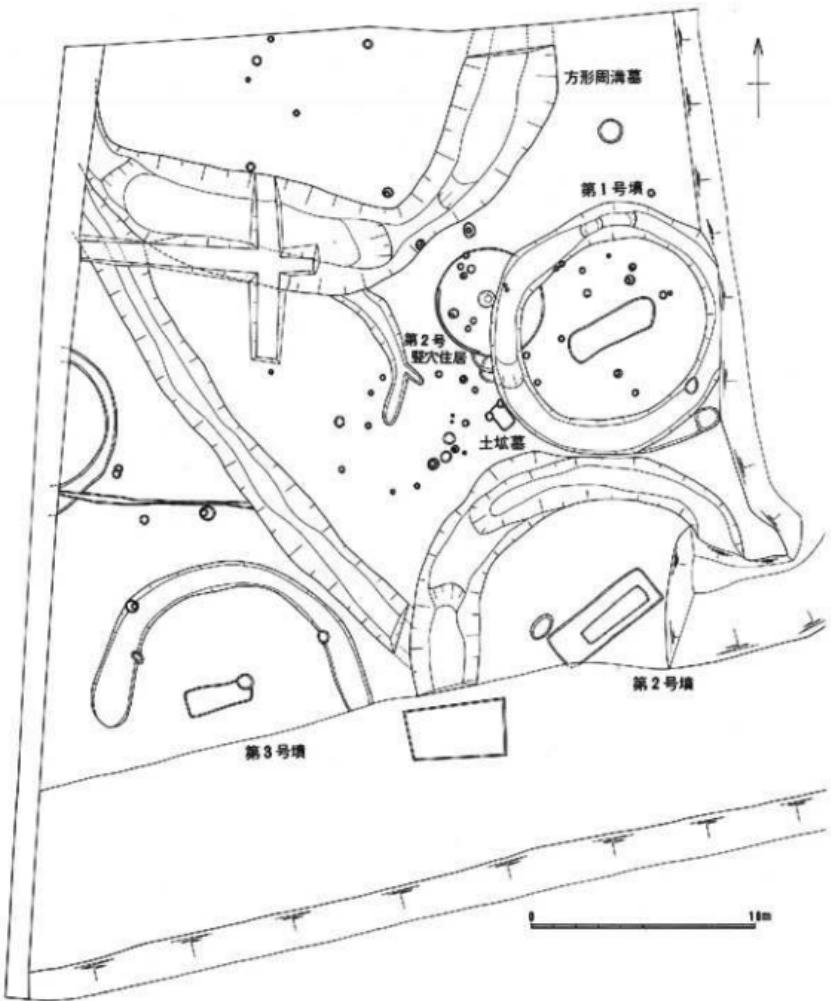


第2号墳主体部副葬品・鉄器

図版八  
南部地区遺構平面図



図版九 北部地区遺構平面図



---

国道 161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和57年度)2

## 高田館跡遺跡発掘調査概要

昭和57年12月10日

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

助成 滋賀県文化財保護協会

印刷 富士山版印刷株式会社

---